海外留学記

青年英語教師のアメリカ留学記

――1969年夏――Ⅱ

辻　井　榮　滋

Ⅱ．リツル・アウティング――ニューヨークとワシントンの絵はがき――

●再び黒人問題に思う

思い出多いキャンパスをあとに，私たちがリツル・アウティング（息抜き）の旅としてニューヨーク，ワシントン方面へと向かったのは，７月25日の朝であった。キャリッジ・ハウスの前で他の留学生たちも多く見送ってくれた。７時半にスクールバスが私たちをバス停まで送ってくれた。ボブが一緒に来てくれた。そして私たちと荷物をガソリン・スタンドの前に下ろすと，バスはまた学校へともどって行った。ボブはバスの窓から見えなくなるまで手を振っていた。涙ぐんでさえいるようだった。リクライニング・シート，冷暖房，トイレ付きのグレイハウンド・バスは，８時15分にブラトルボーロを離れてフリー・ウェイに入り，時速60～65マイル（約百キロ）のスピードでニューヨークを目指した。

予定通り１時過ぎに，私たちはニューヨークのポート・オーソリティ・バス・ターミナルに着いた。途中ハーレムを通過したが，何か異様な感じに襲われた。職もなくうろついている黒人の何と多いことか。夜のハーレムの一人歩きはひどく危険だと何度聞いたことであろう。最近では昼間でもずいぶん物騒だという。また，黒人差別をするなんてケシカランという言葉もよく聞く。しかし，そのことが単に偏見とか差別意識だ……で済ませられるだろうか。つまり，一般の白人が黒人を嫌悪する気持ちも，このハーレムに来れば理解できないこともないのではないかと感じたことを今自白しなければならない。なるほどアメリカに来る前までは「黒人と白人とどこが違うんだ。なぜ差別したりするんだ」と，その矛盾に単純に怒り苦しみさえしたものだった。だのに，ここに来て彼らに接した時，実は私もやはり差別者の立場に立っていたことに気づいたのであった。と同時にまた，それは出発点でもあった。真っ黒で青光りすらしている黒人もいれば，黒人と気づかないほどの黒人もいる。そのバラエティにもかかわらず，アメリカ社会においてはたとえ何分の一，何十分の一でも黒人の血が混じっていれば，つまり白人と見間違えるような皮膚の色をしていても，やはり黒人なのである。そういうさまざまな黒人をハーレムに見る時，日本人なら誰しも，私が持ったのと同じような印象を多少にかかわらず抱くことだろう。しかし，それは実は許されないことであるのだ。他国のことだと見て見ぬ振りをするわけにはいかないの

だ。私は，ジムが「ヴェトナムの１ヶ月の戦費でハーレムが再建できる」と言ったことを思い起こした。黒人問題は，今やアメリカ社会のみならず，世界のかかえる現実の，そして未来へと続く大問題なのである。

●夜のマンハッタン

ブラトルボーロからニューヨークに着いたこの夜，たまたま面白い体験をした。というのは，11名のメンバーのうち，M君の知人であるフランクという青年夫妻が私たちを夜のニューヨークに案内してくれたのである。フランクは，ノースカロライナ州立大学の大学院生で，シティ・プラニング（都市計画）を研究しており，妻君もまた同大学の４回生だという。フランクの父親が裕福な弁護士なので，２人が若くても十分やって行けるのだろう。羨ましい限りである。

さてフランクが「どこへ行きたいか，何を食べたいか」と言うので，私はとっさに“Japanese food!”と，他のメンバーにも構わず声を発してしまった。しかし異論はなかった。もうひと月近くも日本を離れていると，日本人ならやはり誰しも日本食にありつきたいところである。結局，皆の心を私が代弁したような格好になった。フランクも妻君もにっこりうなずいた。そこで早速市内バス（一律20セント）で数ブロック行った日本料理店「末広」（35 East 29th Street）に入った。プーンとあの懐かしいおつゆの香りが漂って来て嗅覚を刺激するや否や，なぜか興奮せずにはおれず，同時に日本人であることを明確に再認識したのである。摩天楼の立ち並ぶマンハッタンにあって，この日本料理店の構えや店内の造りは，私たちには何か異様に映った。どこか中国的な雰囲気が感じられたのである。だが現われた女将や女中は，紛れもなく日本人であった。

メニューに出ているアルファベットの日本食も目に楽しく，早速私は定食を注文した。飯，刺身，エビと隠元のフライ，赤だし，鶏肉・昆布巻き・卵巻き・大根煮の取り合わせ，ほうれん草のお浸（ひた）し，そしてデザートには西瓜――これが定食の内容であった。久しぶりの和食に皆の顔も終始綻（ほころ）び放しで，私ももう何年も日本食にありついたことがないかのように，飯を３杯もお代わりするのだった。締めて３ドル55セント（約千三百円）の贅沢な夕食であった。

それから私たちは，あの有名なタイムズ・スクェア（Times Square）に出かけた。そして，その煌々（こうこう）と渦巻くネオンの海を目の当たりに見た。大小色取り取りのネオンが眩しく人々の面々に輝き続ける。それにしても，夜の10時だというのに相当な人出である。まさにニューヨークの大歓楽地帯だ。いかがわしいストリップの小屋も小路に入れば客を誘っているし，アングラを売りつける青年もいる。ホット・ドッグやハンバーガーを声を大にして売っている屋台も見られる。ともかく，ありとあらゆる歓楽施設が集まっているのだ。活気が，そして，熱気さえがここには漲っている。何かで読んだ，大晦日のタイムズ・スクェアのことを思い起こした。時計が新年を告げると，その時ばかりは無礼講で，ここに集まる人たちは誰彼なしにキスをしてもよいのだということを……。

そういう生気に満ちているかと思えば，心を曇らせるものも存在する。乞食（こじき）だ。ネオン眩しいタイムズ・スクェアの街路をあわただしく通り過ぎて行く人々の中にあって，１人の老いた女の盲人が金盥（かなだらい）を持って，歌を歌いながら金を請うているのであった。その姿は何とも痛ましく，ここにも資本主義社会のひずみの一端が覗いていた。

ところでこのあまりにも有名な広場も，その名の由来を知っている人は案外少ないのではなか

ろうか。「ニューヨーク・タイムズのビルがこの広場に面しているところから，そういうふうに呼ばれるようになったんです」とフランクが丁寧に説明してくれた。

このあと私たちは地下鉄に乗り，一気にマンハッタンの南端まで突っ走った。「海からマンハッタンの夜景を見せよう」とフランクが提案したのである。スタットン・アイランド・フェリー（Staten Island Ferry）というフェリーボートがニューヨーク湾沖のスタットン島まで往復運航しているので，その船上から夜景を楽しもうというのだ。驚いたことに，その運賃が何と往復10セント（36円）だという。とても信じられなかったが，事実だった。

「ニューヨークはどこへ行っても物価が高いけど，このフェリーだけは “bargain” なんですよ」と言ってフランクは笑った。

15分か20分ばかり待って，フェリーはやがて出航した。最初はそれほどでもなかったマンハッタンの夜景が，徐々に驚嘆に値するものとなって行った。私たちは，ずっと甲板に出ていた。寒い。初めは涼風を快く頬に受けているという程度であったが，やがて沖に出るにつれて，身を震わせるほどの寒風となった。それでも，私たちはニューヨークにいるのだという実感をその寒風に感じ身を熱くしていたから，我慢できないほどのものでもなかった。もう10時半も回っているというのに，週末とあってかなりの乗客である。若いカップルが何組か，他の多くの乗客に混じって甲板で抱擁を繰り返していた。甲板は，夜景を楽しめるようにと，ボストンのプルーデンシャル・センターの展望台のように灯をつけていないから，カップルには格好のデートとなるのである。フランクの妻君も，フランクの手をしっかりと握っていた。私は一面非常なノスタルジアを抱きつつ，反面彼らの姿を美しく思い祝福もできるのだった。また人前で堂々と抱擁したり，熱い接吻を交わしたりできるアメリカの若者の勇気というか，国民性を羨ましくも思ったことであった。

かなり強い潮風が髪を乱すうちに，フェリーはもうかなり沖に出ていた。そしてあの自由の女神像が，くっきりと夜空に伸びていた。ライトに映えたその青白い像は紛れもなく，世界にその名を知られた女神像である。（明日この像を訪ねる予定である。）マンハッタン島もかなり遠くなって，その摩天楼の夜景全体がきらびやかな姿を見せていた。本や絵はがきで幾度となく見たことのあるあの夜景だ。私だけでなく，他の乗客の口からも，「ワンダフル！」とか「グレイト！」という言葉が漏れるべくして漏れた。しばしの間，皆じっとその美しい夜景を眼に刻みつけているようであった。強大な資本主義の誇示を，私はその摩天楼群の無数の窓から漏れて来る灯に感じていた。

そのゴージャスな夜景に比し，ニューヨーク湾の水はかなり濁っている。イースト川やハドソン川から吐き出される水，それに船の排出する油，さらには工業地帯の汚物・汚水などがその原因であるに違いない。よく見ると，泥水のようでさえある。

しかしまた，目を上げると，このマイナス点を帳消しにしてしまいそうなマンハッタンの美しい夜景があった。

「12月の，クリスマスの頃になるとね，摩天楼のそれぞれが合作で十字形に灯をつけ，あとは全部消すの。そしたら，クロスの形がくっきりと浮き出て，それをこのフェリーから眺めると，それは美しいのよ。」とフランクの妻君は，顔を綻ばせて私に話してくれた。

片道20分，スタットン島に着いて，まもなくフェリーはもと来た航路をもどって行った。１日

10万人を運ぶというこのフェリーの運賃が往復わずか10セントとは，フランクが言ったように，ニューヨークではまさに「バーゲン」である。彼らは，こうして親切にも夜遅くまで私たちの案内を買って出てくれたのであった。「末広」での定食にしても，このフェリーにしても，忘れ得ぬ思い出である。

忘れられないことの１つに，ニューヨークの地下鉄があるが，これについてもほんの少し触れておこう。世界の地下鉄の中でも最も速いということらしいが，電車そのものは実にお粗末，日本の電車などとは比較にならない。座席は堅いし，蒸し暑いし，おまけにその騒音ときたら，ちょっと想像が難しいだろう。人間の限界を感じさせるのだ。鼓膜が破れるのではないかと不安になるほど……。巨大資本の象徴である摩天楼群の華やかさに隠れて，今日さまざまな，しかもきわめて深刻な問題が山積みされているニューヨーク――アメリカではある。

●ニューヨーク観光――その１

ニューヨーク滞在２日目は，皆で観光を試みた。市内バスでフィフティ・スリー（53番）ストリートまで乗った。そこが，グレイハウンドの観光バス乗り場である。珍しくどんよりと曇って，小雨が路面を濡らしてさえいたが，そのうちに上がる気配はあった。

10時過ぎ，デラックス観光バス No. 658が，私たちや他の外人客を乗せて１日観光のツアーへと出発した。面白いことに，ガイドは男性であった。日本なら，まず男性の観光バスガイドなどお目にかからないが，ここでは普通の乗り合いはすべてワンマンで，車掌はいないし，たまたま観光バスに乗ってみると，ガイドが男性であったりで，「所変われば品変わる」とつくづく思ったことである。

ハーレム，セントラル・パーク，コロンビア大学などをゆっくりと通過した。ハーレムには，この日も黒人がごった返していた。何をするというのでもなく，数人がたむろして，漫然と雑談をしたり，あるいは黙り込んだりしている。白人は，この世界最大の黒人街ハーレムを多分に観光ルートに乗せている嫌いがある。それともその恥部を，優越感を持って，惜しみなく見せたいとでもいうのであろうか。

最初の停車地，聖ジョン大聖堂の前に降り立った。それは「あっ」と言わんばかりの巨大な建物であった。私はしばしの間，ただただ圧倒されるままに立ち尽くした。正式には“The Cathedral Church Of St. John The Divine”と言うが，その華麗かつ豪壮なるゴシック建築の管理・保存の完璧なること，アメリカならではの成せる技であろう。しかもこのニューヨークには，ほかにも聖パトリック大聖堂やエマニュ＝エル寺院といった巨大な聖堂などがあるのだから，驚くばかりである。この中に足を踏み入れて，驚嘆の度合いはさらに深く大きくなった。讃美歌が巨大な堂内に木霊し合って，何とも言えない宗教的雰囲気が濃厚である。奥行き，天井の高さ，広さ，……どの点を取っても，これほど大きな聖堂を私は見たことがない。「物すごい！」という言葉が適当でさえある。ことにそのステンド・グラスの大きさと美しさは筆舌に尽くし難い。数においても群を抜いている。長崎の大浦天主堂がまるでミニチュアのように思われる。

讃美歌と巨大な内部のムードに酔いながら，やがて私たちはアムステルダム・アヴェニュー，112番ストリートにあるこの大聖堂をあとにした。そして繁華街のあるレストランで昼食を取った。このレストランのそばの歩道の人込みに，片足のない乞食が粗末な車に乗って金を乞うてい

るのを見た。それを見て，私はいたたまれない気持ちになった。どうしてこんなに乞食が多くいるのだろう。ところもあろうに世界のニューヨークのど真ん中に……。いや，ニューヨークだからこそそうなのだろうか。私はニクル（5セント白銅貨）を1枚罐の中に入れてあげた。“Thank you.”という弱々しい声が返って来た。この白昼に，しかも人出の多いこの繁華街で，私のごときプロレタリアートに金をせびらねばならないとは……。ニューヨークとは，それは不可解で美しい，しかしまた同時に，納得の行く，醜い巨人なのである。

昼食のあとバスは，マンハッタンを南下し，グリニッチ・ヴィレッジを垣間見て，やがて有名なチャイナ・タウンに止まった。どんなところかと期待していたが，結果は完全に期待に反するものであった。皆そう思ったように，私もあまり好感を持てなかった。一巡してみたが，中国風の造りや雰囲気は十分感得できたにもかかわらず，ニューヨークの名所として訪ねるには，その資格を十分には有していないようだ。ちょっと通りの路上を見れば，それはうなずけることだ。紙屑，ごみが目に余るほど落ちていて，実に見苦しい。夜景などはことに美しいというこのチャイナ・タウンだが，しかしこう汚くては話にならない。それとも夜の街，夜さえ良ければいいとでもいうのだろうか。何もこのチャイナ・タウンばかりが汚いのではなく，ニューヨークのどこへ行っても，いやボストンやワシントンなどでもそうだった。概してアメリカ人は衛生観念が乏しいようである。このニューヨーク滞在のあとワシントンを訪ねるが，その際，ホテルのロビーで次のようなエッセイを記したのでここに添えておきたいと思う。

「……その次に気づくのは，街路の汚さである。特にニューヨーク，ボストンなどの大都市になるほど，それがひどいようだ。ボストンの都は，その古さと新しさとが調和した実に美しい街だとは思うが，足元が乱れている。紙屑や罐ビールの空き罐といったごみ屑が，道路という道路に散らばっているのである。ニューヨークなどは全く話にならない。ボストンの建物の美的調和もニューヨークの高層ビルの壮大さも，その足元を見られればもうおしまいである。

3つ目に気づくことは，食事に関してである。彼らは食前でもほとんど手を洗わない。お金を払ったその手でパンを千切って食べる。見ていると，ぞっとする。われわれ日本人の中にもそういう者がかなりいるけれど，アメリカ人は大概そういうことにはお構いなしだ。おまけに手を洗うところがなかなか見当たらない。キャフェテリアに水はあっても，それは飲料水であって，日本のように栓をひねって手を洗える類いのものではない。手を洗いたければ，まずトイレに行かねばなるまい。“Where can I wash my hands?”と言えば，「トイレはどこですか？」と聞いていることになる，というのもうなずけるわけである。……」

●ニューヨーク観光――その2

さて，市立図書館を通り過ぎ，世界経済の中心ウォール街を一瞥して，やがてマンハッタン島の最南端バタリー公園（Battery Park）へと出た。目前には，ニューヨーク湾が広がっている。マンハッタンを挟んで西のハドソン，東のイースト両河川が注ぎ込む有名なニューヨーク湾，しかもここから望めるのは，詳しくはUpper New York Bayと呼ばれる湾である。そのはるか彼方に，どんよりと曇った空に向けて伸びている像が，ぼんやりとではあるが目に入った。自由の女神像だ。夕べ，フランクたちと一緒にライトに映える青白い像が見えたが，近くまで行ってつぶさに眺められるのはこれが初めてである。

ところで，バタリー公園はかなりの人出で賑わっていた。公園の入り口には屋台店が並んでいて，みやげ物やポップコーンやアイスクリーム，キャンデーなどを売っていた。土曜日とあって家族連れが目立つのは，日本の週末の行楽地と類似しているようだ。

このバタリー公園のすぐ前が船着き場になっていて，サークル・ライン・スタチュー・フェリー（Circle Line Statue Ferry to Liberty Island）の乗り場はここである。私たちは長い列を作って，まもなく大きく揺れるフェリーへと乗船したのだった。

いっぱいの乗客を乗せたフェリーは，汽笛とともに船着き場を離れる。あの霞んで見える女神像まで1.5マイル（約2.4キロ），ニューヨーク湾を走るのである。デッキは，きわめてコスモポリタンの雰囲気が濃厚である。髪の色１つとってみても，金，銀，黒，茶，褐色と，実に多彩だ。まさに「人種のるつぼ」である。さらには服装にしても色取り取りだ。赤や白，それにブルー，紺，茶，黄，紫，ピンク……と，目も覚めんばかりの鮮やかさだ。彼らの多くはベンチに腰を下ろさないで（というより，すべて席は占められており，下ろす余地もなかったので仕方なしに）立って，少しずつ遠ざかって行くマンハッタン島の摩天楼群の偉容やニューヨーク港，それにイースト川にかかる有名なブルックリン橋やマンハッタン橋などにしばし呆然とする。何と巨大な怪物であろうか。何と不思議な都市だろう。こうしてニューヨーク湾から眺めるマンハッタンは，何の苦悩も耐え忍んでいるようにも見えない。まさに資本主義の生んだ素晴らしい光景である。数え切れないほどの何十階というビル，日本でその１つでも建とうものなら，それこそすごい名所になること間違いなしである。それがこんなに多くのビルが林立しているとなると，よほど奇形のビルであるとか，エンパイアのように飛び抜けた高層ビルでないと，なかなか目立たない。第一，これだけの数があると，その名前を覚えるだけでも難しい。フェリーが出発してマンハッタンの摩天楼群全体がしだいに手に取るようにすっぽりと視野に収まるに連れて，ため息を伴った声がデッキのあちこちから聞かれるようになった。夕べの夜景も素晴らしかったが，この光景もそれに優るとも劣らない迫力を備えている。バタリー公園も，やがて摩天楼と海面との間に挟まれた緑の細い線となった。

ところで，マンハッタンの南端にあって，ハドソン川寄りに建設中と思われる赤い鉄骨が微かに目にとまった。夕べ，フランクが話してくれたあのビルである。「世界貿易センター」のビルで，何でもこれが完成すると，エンパイアを抜いて，ついに110階の高さを誇り，世界一の王座に着くという。長らく「世界一」の座に君臨し続けて来たエンパイア・ステイト・ビルも，やはり時の流れに勝てない。天に向かう記録も破り続けられるものなのか。記録の更新，それは人間世界の１つの鉄則ですらあるようだ。あのエンパイアも，この鉄則にかぶとを脱がねばならない時がもうすぐ目の前に迫っているのである。（聞くところによると，エンパイアの関係者たちは，世界一の王座をほかに奪われまいと，この「世界貿易センター」のビル建設計画に際して，いろいろと妨害を試みたという内幕があるらしい。）

さて，自由の女神がその姿を私たちの目前に現わした。もっと小さなものだろうと予想していたが，その予想をはるかに上回る巨大な像であった。トーチを持つ手が天を突き刺さんばかりに伸びている。それまで甲板でマンハッタンの摩天楼やブルックリンの方へ目をやっていた多くの人たちも，やがて揃って女神像の方へと目を向けて行った。フェリーは，この像のあるリバティ・アイランドをほぼ半周する格好で，この島の北西寄りの桟橋に横付けしたので，女神像をい

ろんな角度から眺めることができた。夕べ，暗いニューヨーク湾にひっそりと青白いライトを浴びて立っていた女神像とは，またきょう見る像は違っていた。

船を降りて像の方へと向かった。マンハッタンから望むと，ただこの像だけが海上にぽつんと立っているように見えるが，いざ近づき上陸してみると，なかなかどうしてかなりの島である。緑がここにもいっぱいで，気分が爽快になる。ウィークエンドとあって，この島にも大勢の人々が繰り出していた。

女神像は，歩いてすぐである。近づくにつれ，さらに大きなものであることを認知した。ペデスタル（台座）の下の入り口に近づくと，驚くほど長い人の列が続いていた。上に上がるエレヴェーターを待つ人たちだ。そんなものを待っていたらいつのことになるか知れないので，私たちは階段の方を利用することにした。階段の方も大勢の人でスムーズには上がれなかった。かなり急な階段を10階も登ると疲れる。皆エレヴェーターに乗ろうと待ち構えていたのもうなずけた。

10階がペデスタルの頂上であった。そこは身動きならぬほどの人でいっぱいだった。四方が見渡せるようになってはいるが，展望台のスペースが狭いのと人が多いのとで，なかなか思うように動けない。それでも框（かまち）の石には，「高さ151フィート１インチ，銅100トン，スチール125トン，合計225トンを含んでいる……」という説明の銅板の文字がはっきりと読み取れた。アメリカの独立を祝って，フランスが友好関係のしるしにと寄贈したものであることは有名だが，これを建てるのに25万ドル（９千万円）の巨費が投じられたことを知れば，その底知れぬ資力にただただ驚嘆せざるを得ない。さらに，この像を乗せた下のペデスタルに，アメリカ自身が22万５千ドル（8100万円）を投じているというから，開いた口がふさがらない。

大変な数の見学者のために，私たちはこのペデスタルからさらに12階登った像の頭部にまでは行けなかった。ペデスタルの上からニューヨーク湾，ニュージャージー，ブルックリン，マンハッタンなどを眺めたのであった。

●ニューヨーク観光――その３

自由の女神像に印象を深くして，私たちはやがて再び船上の人となり，バタリー公園へともどった。そして，いよいよこの観光最後のルートに入る。マンハッタンをイースト川沿いに遡る。右手にフェリーからも見えたブルックリン橋やマンハッタン橋を見ながら，まもなく国連ビルの雄姿を捉える。スモッグに霞んでいたが，紛れもなく国連ビルであった。マッチ箱を立てたような形をしたこのビルは，もうあまりにもお馴染みである。国連の任務，世界におけるその位置等々については，ここで詳しく述べたてることもないだろう。とにかく126ヵ国（1968年現在）という大変な数に上る国連加盟国の代表及び第一線の関係者が活躍するユニークな建物である。世界各地で絶え間なく起こる戦争，クーデター，暴動，……にストップをかけ，平和解決への糸口を見つけるべく日夜努力を重ねるこの国連に，何かと非難や批判が浴びせられているにもかかわらず，いやその非難や批判こそは，国連に寄せられる大きな期待以外の何ものでもないだろう。またそのことは，国連に集まる期待がいつまでも大きなものであり続ける限り，世界平和の真の実現が望み薄であるということにもなるだろう。ガラスとスチールの調和した39階建ての国連ビルは，アメリカのみならず，世界の現実的救世主として大きな期待の目で見つめられているのである。

さてバス・ツアーの最終見学地は，世界一の高層建築エンパイア・ステイト・ビルである。7月3日の夜遅くペン・ガーデン・ホテルに着いた時にもちらっと見えたのが非常に印象的であったこの途轍もなく高いビルについては，国連ビルと同様，いやそれ以上に世界中の人々にすでにあまりにもよく知られているので，紙数を割く必要もないだろうが，それでも一日本人として，初めて目の当たりに見，そして86階の展望台まで上がった者として，やはりその感激を綴っておきたいと思う。

バスのガイドは，「このエンパイアが本日のツアーの最終見学地で，あとは自由に解散，ただしグレイハウンドのバスの乗り場までお乗りになる方は，○時○分にここを発車しますので，○時○分までには658号車にお戻り下さい。」と，まあざっとこんなことを言った。そして私たちをそこサーティ・フォース（34番）・ストリート・アンド・フィフス（5番）・アヴェニュー（34th Street and Fifth Avenue）に降ろした。ちょうどエンパイアの前であった。写真で見たり遠くから眺めたりすると，この建物は群を抜いているが，さあいざこの建物の入り口に立ってみると，別にどうということもない。摩天楼群の谷間にあって，通りを大勢の人々が通り過ぎて行くのを見るばかりである。これといって取り立てて異なるものがあるわけでもない。しかし，上を見る。入り口の上にEMPIRE STATEの刻字が目に入る。そしてそのさらに上にはビルが天に向かっているのだが，目に入って来るのは途中までである。せいぜい30階か40階あたりまでしか見えない。それから先は切れて，ないように見える。

もらったパンフレットの説明文では，「この建物はインディアナ産の石灰石と花崗岩とでできており，きらめく無数のステンレス・スチールを配し……」という箇所が，私の興味を引いた。遠方から望めば，なるほど高さは抜群だが，細いので貫禄がないように見える。だがいったん近づくと，地表に占める面積も驚嘆に値する。実に，サーティ・フォース（34番）・ストリートからサーティ・サード（33番）・ストリートのワンブロック，そしてフィフス（5番）・アヴェニューからシクスス（6番）・アヴェニューまでのおよそ半ブロックを囲む面積を占めているのである。その高さ1472フィート（430メートル），このビルに働く人の数1万6千，驚きはまだ続く。このビルを訪れる人の数が毎日ざっと3万5千，このビルの清掃に200人の掃除人が必要であること，また6千5百にも及ぶ窓を月に2回も掃除している……こういった断片的な知識ではあるけれど，われわれ日本人の想像も及ばぬ数字がこの世界一のビルを支えているのである。ごく簡単なものではあるが，このパンフレットにはまだまだこういった類いの驚くべき“FACTS”が淡々と図示してあるのだ。

こういう諸事実を頭に入れて，いよいよ私たちは何十人もの観光客が作っているエレヴェーターへの列に加わることにしよう。他の名所もそうであったように，ここもまたすごい人である。

ようやく順番が来て，エレヴェーターに乗った。まずこのエレヴェーターは，1階から80階までノンストップで上がる。時計を見ていたら，80階まで上がるのに1分20秒かかった。そして80階で乗り換えである。別のエレヴェーターでさらに80階から86階まで。かかった時間が15秒。この86階に観光客のための最初の展望台（86th Floor Observatoryと呼んでいる）があるのだ。

展望台へと出た。ヒャーッとするほど涼し――いや寒かった。半袖の薄いセーターを身に着けていたので仕方がないと言えばそれまでだが，それにしても，オーバーコートをひっかけた婦人を何人も見かけたくらいだから，この「寒い」はかなり真実味を帯びていると思う。展望台に出

るや，私はすぐ上を見た。さらに400フィート余りの塔が聳えている。そして102階の展望台（102nd Floor Observatory と呼んでいる）まで行こうとする人たちの列が続いていた。あまりにその数が多いので，私は86階の展望台からマンハッタンの壮大なパノラマを一望することにした。下から仰ぎ見ていた摩天楼群の偉容と，こうして86階のエンパイアから眺めるマンハッタンとはまた違った味わいがある。先ほどのフェリーから望んだ摩天楼群も胸を打つものであったが，この86階からの眺望も，それは見事なものである。北を望むと，ハドソン川や広大なセントラル・パークの緑が箱庭のごとく手に取るように見える。それから今度は逆に南の方に目をやると，マンハッタンの南端がすぐそこに見え，イースト川の河口や自由の女神像が遠くに霞んで見える。こうしてこの展望台から眺めると，マンハッタンのビルの林立がまるで大小無数の積み木のようである。手に取ってその１つ１つを持ち上げることができるほどに小さく見える。下の通りなど見下ろせば，少々胸がおかしくなる。自動車の列も，まるで蟻のごとくゆるりゆるりと動いて行くに過ぎないのである。改めてエンパイア・ステイト・ビルの偉大さを思い，アメリカ資本の巨大さを思わざるを得なかった。しかも，このエンパイアよりさらに高いビルがマンハッタンの南端に建設中というから，アメリカの力は全く計り知れない。半袖のセーターのために鳥肌の立つ腕をかばうようにして組みながら，この雄大なパノラマにしばし茫然と立ちつくす私であった。

寒さに加えて時間的な制約もあったので，私はこのパノラマをしっかりと眼と胸に刻み込み，展望台の中のみやげ物を売る店を覗いてみることにした。ペナント，エンパイアのミニチュアビル，皿，鉛筆，キー・ホウルダー，……ボストンで見たのと同じような種類のみやげ物がずいぶん並んでいる。手に取って眺めてみた。ここに来る前に，何かの本で「みやげ物には気をつけろ。日本製が大部分だから。」というような意味のことを読んで心得ていたからだ。なるほど，ある，ある。“made in Japan”がどの種類の商品にも刻んである。日本製のほかには香港製が多い。この２つが圧倒的だ。私はミニチュアのビルがほしいと思ったので，いくつか並んでいるうちの１つを手にして裏返した。“made in Japan”であった。金属製のものを片っ端から見てみた。すべて日本製だ。がっかりして，最後の望みを木製のミニチュアビルに託した。“made in USA”ホッとした。「これがアメリカ製なんだなァ」まるで日本で買物をしていて，珍しくアメリカ製品を見つけたりした時のような，一種の感慨を覚えた。何かの本で読んだことは嘘ではなかったのである。しかし，よくもまあこれだけ日本製品が出回っていることだろう。呆れるばかりだ。

地上86階の思い出の１コマである。

●ニューヨーク――資本主義の谷間

ニューヨークの１日観光は，私たちにアメリカ資本主義の威力をまざまざと見せつけた。その莫大な富の蓄積に陶酔すらした。しかしその反面，胸を暗くする面がかなり目に飛び込んで来たことも否めない。２，３気づいた点をピック・アップしておこう。

ニューヨークに着いた25日の夜，案内してくれたフランク夫妻が話してくれたのだが，アメリカのチップ（tipping）についてのこれまでのあいまいな理解がはっきりした。彼らによると，食堂のウェイターやウェイトレス，ベルボーイ，赤帽などは，賃金が安いあまり，客からチップをもらわないと生活して行けないのだという。ましてや物価高ではその名も高いこのニューヨークでは余計そうなのである。チップというシステムは，どうしてもなくてはならないから生まれた

のだと考えられる。タクシーには何度か乗ったが，走行距離に対する料金だけ支払えばよいという日本のシステムとは訳が違う。ニューヨークでは（のちにワシントンでも，デンヴァーでも）運転手はかなりあくどく，客から金を巻き上げて行く。例えばわれわれ旅行者はスーツケースやトランクなどを持っているが，タクシーに乗ろうとすると，運転手が実に親切に手伝ってくれる。運転席からわざわざ降りてである。ここで「何と親切なんだろう！」なんてありがたがっているのはお上(のぼ)りさんもいいところ。降りる時にチップとしてごっそりやられるのが落ちである。日本でも，東京や大阪などではかなりあくどいタクシーもあると聞くが，しかし，全体的に見れば，アメリカのタクシーとはまず比較になるまい。チップ制に頓着する必要のないわれわれ日本人は，アメリカに来ると最初，このチップ制には大いに困惑してしまう。そういう習慣のない日本は，まことに結構だと言わねばなるまい。……

話は変わるが，「オートマット」とか「キャフェテリア」と呼ばれる食堂で食事をしたことが何度もある。ここで私は前に考えた黒人問題とともに，さらにまたアメリカ社会の持つ１つの歪みを見たように思う。すなわち，１人者――しかも年老いた１人者――がずいぶんいるということである。アメリカの家族制度から察すればおよそ見当はつくが，それにしてもその数が相当見られるのだ。「レストラン」の雰囲気とはまたまるっきり異なる。何か暗く，陰鬱で，歯の抜けたような感じを直感した。なるほどキャフェテリアやオートマットは，レストランに比して人件費の節約ができるから，コストが割安である。非常に経済的である。ところが，その利用者の実情を見ると，やはり社会階級の差をはっきりと感じることができる。レストランに比べ，キャフェテリアやオートマットには，中流以下の所得者階級の姿を見かけることが概して多いようである。貧乏な未亡人や男やもめの寂しい人たちもその中にいる。われわれ旅人ないしは外国人にとって，キャフェテリアやオートマットはいろんな意味で非常に便利だ。しかし，彼らにとっては「便利である」というより，まず「安いから」という経済的理由によって利用の対象となっているのである。端的に言って，レストランは豪華でゆとりのある雰囲気なのに対し，キャフェテリアやオートマット，特にオートマットについては何か寂しい人生の吹きだまりといった感が強いのだ。毎日のあわただしい生活の中にあって，最も楽しく潤いがあってよいはずの食事の時が常にこんなところでなされねばならないとなると，概してまずいと言われるアメリカの食事がどれほど味気ないものであろうか，と胸を痛くしたのである。私の入ったいくつかのキャフェテリアやオートマットにも寂しい１人者はいた。痩せた小さな年老いた男，ネクタイはよれよれ，中には昼間から酔っぱらっている者もいる。やはり同じく痩せこけた老婦人，彼らは例外なく１杯のコーヒーと薄いトーストを１枚，ゆっくりと時間をかけて，考え込むように飲食していた。これがアメリカ？　私の脳裏にそんな疑問と不安が横切った。カメラを片手に入って行った一旅行者としての私は，顔をこわばらせるほどであった。給仕係を見る。うつろな目つきで，柱にもたれて冷たく見ている。客が食べ終わり，席を立ったあとの片づけを待っているのであった。……

また，このニューヨーク滞在中，ブロードウェイや５番街通りを歩いたが，幾度か乞食に声をかけられたことがあった。

「お願いですから，ニクル（５セント銀貨）を恵んでいただけませんか？　私，病気なんです。ほんとに病気なんです。」

そう言って，見すぼらしい格好をした40か50歳の男が近づいて来た。見ると，ずいぶんと黒く

汚れたシャツとぼろの上着を着ている。顔も垢(あか)で相当汚れている。鼻の頭には汗粒が光っている。彼は涙を流しながら，わかりにくい英語でそう言うのである。S先生が５セント銀貨を１枚手渡してやると，“Thank you, sir.”と丁寧に礼を言って，力なくとぼとぼと去って行った。その後ろ姿には資本主義の暗影がつきまとっていた。それにしても５セント……日本円でわずかに18円，物価高のニューヨークだから，まず５～10円というところだろう。現実に，そのわずかな金を乞い求めてさまよう人間がうようよいるのである。この現実をやはり見逃したり否定したりすることはできない。なるほど「世界経済の中心」，「摩天楼の偉容」……等々，ニューヨークを形容する言葉は尽きない。けれどもそれらは，ニューヨークのよさというか，資本主義の華麗な面ばかりをとらえている場合が多い。巨大な資本主義の繁栄の陰に泣く人々の少なくないことも，やはり銘記しておきたい。彼ら乞食を最下層とする下層階級の人たちは，競争に落伍したのであり，足並みを揃えてついて行けなかったのだろう。しかし，それだけでは問題の解決にならない。こんな人々がこの大ニューヨークの至るところに群がっているのである。ぼろの服を着，垢で黒ずんだシャツをつけた人間が路上のあちこちに横になったり，立ちすくんだりしているのを何と多く見かけたことか。黒人も含めて。そして一方，一握(ひと)りの上流社会の人間たちは，夜ごと催される絢爛たる舞踏会へと出かけて行くと聞く。……

さて，前述の「寂しい１人者」と関連するが，ニューヨークについて最後にアメリカの家族制度のことを少し考察してみたい。

SIT でジョンは，講義の中で“Old People”について話したことがあった。それによると，年老いても裕福なら，立派なアパートに住んで，何の苦労もなく，自適の余生を送ることができる。だが，もし貧乏なら，政府から支給される（十分でない）生活補助金によって，非常に寂しい不幸な余生を送らねばならない。

私は滞米中，「アメリカの家族制度に思う」と題して，次のような１文を綴ってみた。

「アメリカの家族制度が日本のそれと著しく異なる点は，それが夫婦単位であるということだ。日本の場合，長男夫婦が親と同居するというのが，大体従来の慣例となっている。もっとも近頃では，特に大都市においてそういうことも少なくなって来てはいるが，地方の田舎に至ってはまだまだこの慣例が存続しているようである。しかし，アメリカにあってはほとんどその例はないに等しい。ごくまれにはあっても，やはりそれは例外であって，普通子供が結婚すると，親とは別々に新しい生活を営むのである。たとえ長男であろうと……。

さて，上記の著しい相違から自ずと，アメリカと日本の家族制度の長所と短所が浮かび上がって来るだろう。日本では長男夫婦（必ずしも長男夫婦とは限らないが）と親夫婦が同居する。子供ができる。６～７人の家族が普通である。賑やかである。親は老いても，子供（孫）がいるので，寂しさをほとんど感じない。これは長所だ。しかし，嫁と姑という非常に特殊な，難しい関係が，日本の家族制度の１つの癌となって来たことも忘れてはならない。それは，複雑な様相を呈している。

一方，アメリカの場合を考えると，夫婦単位だから，嫁と姑という関係はほとんど論外である。若い夫婦は，彼らの自由な結婚生活を楽しむことができる。親にも何にも煩わされずに，若い生活を思う存分満喫できるのである。

では，アメリカ人のそういう生活にはもはや欠点はないのだろうか。私は，ニューヨークのキャフェテリアやオートマットで見かけた多くの男やもめや未亡人たちが，細々と寂しそうに食事していたのを忘れることができない。彼らは，１人悲しくその日暮らしをしているのである。夫婦が老いても，共に長生きができれば何も言うことはないだろう。けれど，それは断言できない。同時に死ぬことはあり得ないのだ。すると，前に見たようにどちらかが残される。富裕であれば，その余生は何の苦労もないだろう。が，中流以下の人たちにとって，あとに残された人生は全く灰色なのである。

私は，日本の家族制度にいくつかの欠点を見つけるとしても，なおその良さを高く評価したい。アメリカの家族制度の方が必ずしも良いとは誰にも言えぬ。」

以上，簡単に感じたことを走り書きしたのがこの「アメリカの家族制度に思う」であるが，無論十分ではない。ただ，考えてみなければならない諸問題の１つとして提起しておきたい。（なお，1970年の８月26日のNHKテレビで「老後」の問題が取り上げられたが，そのうちで，私がSITで学んだこと，感じたこと等の正しかったことを証明してくれたことがいくつかあったことを申し添えたい。）

●首都ワシントンに向けて

ニューヨーク滞在は，私にさまざまな問題を投げかけ，既成のアメリカ観がかなり崩されてしまった。28日の朝ニューヨークを立つ時も，だから，なぜか心に重たいものが残っていた。しかし，今ここで気を揉んでも仕方がない。一つ帰ったらじっくりと考えをまとめてみようと自分に言い聞かせ，住み慣れた（？）ペン・ガーデンをあとにして，ポート・オーソリティ・バスターミナルからワシントン行き急行のグレイハウンドに乗ったのだった。

ニューヨークを出る時にもすでに小雨はぱらついていたが，ニューヨーク――ワシントン間の半ばを過ぎたあたりを走るうち，大粒の雨がバスのフロントガラスを激しく叩き始めた。見る見るうちに空が暗くなり，稲妻さえ走った。そして物すごい吹き降りとなった。こんな吹き降りは，日本ではちょっとやそっとお目にかかれるものではない。ストームと呼んでいいのだろう。アメリカに来て，何でも日本のものと比較し，その度にそのスケールの大きさに圧倒され通しだったが，まさか雨にまで大差をつけられようとは思いもかけなかった。桁（けた）はずれである。白いかなり太い線が，無数に糸を引くように地を叩く。また稲妻が光る。全く恐ろしい光景だ。とにかく，ハイウェイにも，野にも山にも，小さな茂みの上にも，遠慮会釈なく無謀に雨は落ちて来るのである。アスファルトなど，あれよあれよと言う間に水浸しになってしまった。ニューヨークの方に向かう対向車を見ていると，その水しぶきの物すごさにただただ驚くばかりだ。ことに，あの大きなトレイラー・トラックの上げるしぶきといったら処置なしである。しぶきによってトラックの一部が見えなくなってしまうのだから。これは別に誇張でも何でもない。ありのままを述べているのである。

そんな事態がしばらく続くと，やがてピタリと止む。そしてまた５分ほどすると，同じように激しい雨がやって来る。このため，スピードを誇るわがグレイハウンドも，この時には他の車に右へならえして，スピードをかなり落としたのであった。したがって，首都に着いたのは予定より１時間余り遅れて，午後の３時であった。ニューヨークから約５時間の旅であった。

●車で巡るワシントン

首都での宿舎ダッジ・ハウス・ホテル（The Dodge House Hotel）に着いて，ニューヨークからの疲れを癒やしたのだが，私は少々風邪気味で，熱も幾分あった。ここに着くまでのバスの冷房が効き過ぎていたのである。

その翌朝も鼻が詰まり，まだ熱も少しあったが，わずかなワシントン滞在でもあるので，そんなことも言っておれず，皆と市内見物に出かけることにしたのだった。

午前中，ザァービィ夫人（Mrs. Zerby）というヴォランティアのおばさんが車でワシントンを回ってくれた。どこでも行きたいところへ連れて行くと言ってくれるので，私は「近いところは徒歩ででもまたあとで行けるから，アーリントン墓地へ行ってほしい」と他のメンバーを代表して，彼女に依頼した。彼女は快く承諾し，まもなくアーリントンへ向けて出発した。

アーリントン記念橋を渡ると，広大な緑地に白い墓石が無数に整列しているのが目に入って来る。緑と白の調和の美しさをこの時初めて知った。ここでは「墓」というイメージがすっかり壊される。アメリカのどこへ行ってもほぼそうなのだが，日本の「墓」のイメージからはほど遠く，あの暗さなど微塵もなく，むしろ美しい公園と言った方が当たっているほど，緑の手入れが美しく行き届いているのである。

私はまず何と言っても，故ジョン・F・ケネディ大統領の墓前に参りたかった。ザァービィ夫人は気持ちよく私たちを導いてくれた。小高い丘の斜面にあるこの墓地の緑の間を縫って作られた道路を少し歩くと，やがてさほど大きくもない，白い清楚な感じのする十字架の前にザァービィ夫人は立ち止まった。「これだな！」と一瞬思った。しかし，あの一世を風靡した偉大なる（と言われる）大統領ケネディの墓にしては，あまりにも簡素すぎやしないか，とも思った。広々とした緑地に，白い十字架とそれを取り巻く背の低い木々のさらに濃い緑，それだけなのだが，あまりにも寂しい。

「これがケネディの墓なんですか？」と，思わず私が語尾をかなり上げて聞いた。

「ええ，そうですよ。」と彼女は言う。

首をかしげると，「ロバート・ケネディのね。」と付け加えた。

アーリントン墓地と言えば，兄のケネディのことが頭に焼きついていたので，ロバートのものとは気がつかなかった。

「今はこんなところにあるけど，別のところにもっと立派なのを作っているんですよ。つまり，ここは一時的なお墓なのです。……」

ザァービィ夫人はさらにそうつけ加え，私も納得がいったのであった。

さて，この仮墓地にすぐ近いところに，あの兄が眠っていた。さすがに世界中の人々が悲しみを共有した若き大統領だけに，立派な墓地である。若くして，また，その本領を出し切らないうちに世を去った大統領の冥福を祈らずにはおれなかった。かなりの人が墓前にたたずんで頭を垂れていた。中にはカメラを向ける人もかなりあった。はるかにワシントン市街を望む，このアーリントンの丘に彼は眠り続ける。ワシントン，そして世界の動静を絶えず見守りながら，彼は長く人々の胸に生き続けることであろう。あのダラスにおける惨事が，あの湧き立つ報道の波が，今も人々の記憶に生々しく蘇って来る。しかし，堅くて冷ややかな大理石に刻まれたJOHN FITZGERALD KENNEDY 1917-1963が，彼の死後の時の経過の早さを知らせてくれた。あれ

からもう大統領は２人目を数える……。

それから無名戦士の墓に詣(もう)でたあと，国防総省を訪ねた。空から見ると五角形の形をしているところから，通称ペンタゴンと呼ばれていることはもう特筆に値しない。残念ながら五角形そのものを見られなかったけれど，その大きさは五角形の一辺だけで十分感じ取ることができた。建物の前には何百台という乗用車がずらりと並んでいる。そのほとんどが職員のものであろうか。ともかくこのペンタゴンに勤務する職員の数は実に４万を越すと言われているのだから，それだけでも建物の大きさが伺い知れよう。ザァービィ夫人の時間の都合もあって，詳しい見学はできなかったが，ベトナム戦争の指令がすべてここから出ていることに多少の反発を禁じ得なかった。

ザァービィ夫人との時間は終わり，午後はメンバーだけで国会図書館（Library of Congress）へ行って，貴重な蔵書の数々に接した。「アメリカ合衆国には国立図書館がないと外国人は言うが，Library of Congress は英国の British Museum と同格で，これこそ国立の図書館と言ってもさしつかえない」というような意味のことを何かの本で読んだことがあるが，なるほど州というものが独自の力を持つアメリカにあっては，この図書館こそ唯一の国立図書館と言えるのだろう。全米一を誇るその蔵書は，それは見事である。ちゃんとガイドがいて，多くの見学者を案内してくれる。５百年前のグーテンベルグの手になるバイブルが，特に私の興味をそそった。

このあと，タクシーで商工省（Department of Commerce）を訪ねた。政府の高官と会うというので，少々緊張感を覚えていた。アポイントメントは取ってあったが少し待った。やがて商工長官でも出て来るのかと思っていたら，財産管理部長であった。省内を案内されて，ほんのわずかの時を過ごしただけであった。

親切なザァービィ夫人の車と，タクシーによるワシントン巡りはこれで終わりである。これからあとは，アイヤー（徒歩）による首都巡りが始まる。

●タイダル・ベイスンの辺りにて

商工省訪問のあとは，各自自由行動することになった。私は，Ｓ先生とＭ夫人とともに歩くことにした。ニューヨーク観光を含めてちょうど１週間の観光旅行，……辛い勉強のあとでもあり，またあと２日すれば，シカゴ行きの夜行バスにいやでも揺られねばならない。だから，このワシントンでの限られた時間は，私には貴重であった。できるだけ多く，広く，ニューヨークとワシントンを見てみたいというのが，この１週間の観光に寄せる私の願いであった。

商工省のビルに沿ってほんの少し歩くと，すぐ目の前にあの有名なワシントン・モニュメントが聳え立っていた。一面の緑地，広々とした原っぱに白い塔がすっと空に向かって延びている。実に167メートルもの高さを誇っている。空が曇っていたので，あまり配色は芳しくなかったが，これが真っ青な空との配色であったなら，青と白のどんなに素晴らしい調和を見ることができたであろう。美しい絵はがきのような……。私たちは，このモニュメントへと近づいて行った。モニュメントを囲んで，数え切れないほどのアメリカの小旗が風と戯れている。ここにもエレヴェーターがついていて上まで上がれるので，その入り口には大人や子供が列を作っている。私も上ってみたい気もしたが，まだ他に見たいものがいくつもあったのでやめた。しかしそれにしても，あの独立戦争の際，いわば借り出され，最高指令長官としてコロニーを勝利に導き，建国の父と言われたジョージ・ワシントンを思う時，このワシントン・モニュメントはいつまでも人々の力

強い励みとなるだろうし，この白い塔を目の当たりにする時，ワシントンの残した功績が私たちの胸の奥深く響いて来る。

このワシントン・モニュメントの西側にもずっと緑地は広がっていて，その先に細長いプールのようなスペースが見える。このプールこそは，あのリンカン・メモリアルの正面に位置し，そこから望めばワシントン・モニュメントの美しい塔を，他方こちらのワシントン・モニュメントの方から望めばあのリンカン・メモリアルを映す，リフレクティング・プールである。いわば両サイドから各々の偉人のモニュメントが映る仕組みになった鏡であるわけだ。私たちは，このプールに近づいた。小さな噴水がいくつも上がっている。水をいっぱいこのプールは湛えている。ワシントン・モニュメントを振り返る。大きく，高く，このプールを見下ろしている。噴水の前に立って，前方，そして左右に目をやる。真正面に白亜の殿堂リンカン・メモリアルが堂々と聳え立っている。それにしてもこのプールは，幅はそれほどでないにしても，奥行きがずいぶんある。だから，これから訪ねようとしているあのリンカン・メモリアルがまだ小さく見える。プールの両側に沿って，背の高い木々がこんもりと，ちょうど森のようにプールの長さだけずっと延びているので，いっそう吸い込まれるように遠くに見えるのである。

さて私たちは，このプールに沿って歩き出した。プール自体はそれほど深くはない。恐らく膝のあたりか，もう少し深いくらいであろう。プールの水を見ると，しかしながら，ずいぶんとごみが目立ち，感じが悪い。どこへ行っても不心得者はいるのだ。ワシントン・モニュメントのあたりから見た時には美しく見えたプールだったのに。

プールに沿って150メートル，いや200メートルくらい歩いたろうか？　ようやく私たちの前にギリシャのパルテノン神殿のような姿をしたリンカン・メモリアルが大きく立ちはだかった。その正面の12本のコラム（円柱）が特に印象に強く残った。

階段を登り，聖堂を間近に見上げる。大きな建物だ。まさに白亜の殿堂の名にふさわしい一大記念物である。総大理石――コロラド・ユールの大理石――のメモリアル全体と，その前面の12本の円柱が，訪れる者のすべてを圧倒する。前面，後方，それに両側合わせると，36本の太い円柱だ。36という数字は，リンカンの亡くなった当時の連邦の州の数を表わしているのだという。実に安定度の高い建物である。入り口でパンフレットを一部もらったが，それに詳しい数字も入っているので，紹介しておこう。それによると，このメモリアルは「テンプル（寺院）でないし，パレスでもツーム（墓所）でもなく，各々を具現している」という。ワシントンにリンカンのモニュメントを建立しようという努力が始められたのは，彼の死後2年を経てからのことだった。その後さまざまな経過を経て，ようやくニューヨークからヘンリー・ベイコンという建築家を招いて建築計画をさせ，議会がその最終計画を承認したのが1913年の1月29日だった。そして1914年の2月12日（リンカンの誕生日に当たる）に着工し，このメモリアルが完成したのは1921年5月30日のことであった。建物の総工費は295万7千ドル（10億6千452万円）にも及んだ。……

さて，このメモリアルの中に入ってみる。大きなリンカンの大理石の座像が真正面に目に入る。何十人もの観光客が――大人も子供も――この白い像を見上げては，カメラのシャッターを押して行く。今もリンカンは，国民の英雄であり偶像ですらあるように見える。彼の座像の背後の壁には次のような文が刻まれていた。

“In this Temple as in the hearts of the people for whom he saved the union the memory of Abraham Lincoln is enshrined forever.”（「アメリカ国民のために連邦を救ったエイブラハム・リンカンの思い出は，国民の胸におけると同じく，この神殿において，永遠にまつられる」＝本間長世氏訳）

「頭の先から足の先まで19フィート（約５メートル70センチ）もあるのだから，これが立像であったら恐らく28フィート（約８メートル40センチ）もの高さになるのでは……」ともパンフレットには記されている。改めてその大きさに嘆息したのであった。さらに，この像はピシリリ（Piccirilli）兄弟が４年以上もの歳月をかけて，ニューヨークのスタジオで刻んだものだという。そしてこの像のコストだけで，８万８千４百ドル（３千182万４千円）にも上っている。毎度のことながら，大した資力である。クリスマスを除いて毎日朝の８時から夜の12時まで開けているこのメモリアルに，これまでいったい何十万，何百万の人々が訪ねたことであろう。その多くの人々がしたであろうように，私もまたじっとリンカンの像を見つめ，その雄姿を深く胸に刻み込んでこのメモリアルをあとにした。

近くで見た時にはあんなに汚れていたリフレクティング・プールも，このメモリアルから見ると，真正面前方はるかのワシントン・モニュメントをくっきりとその水面に映し出していた。

この立派なリンカン・メモリアルのちょうど背後を有名なポトマック川が流れている。そしてアーリントン墓地へと続くアーリントン橋は，このちょうど後方にかかっている。ポトマック河畔に出てみた。濁流がゴウゴウと流れて行く。私の期待していたポトマック川とは似ても似つかぬものだった。雨上がりのせいもあろうが，それにしても汚物を含んだその黄褐色の流れは，ただ私を失望させるだけであった。川べりの道を歩いて，次の目的地タイダル・ベイスン及びジェファスン・メモリアルへと急いだ。リンカン・メモリアルに強い印象を受けた直後だけに，ポトマック川の印象はなお悪かった。

やがて，大きな池のようになったタイダル・ベイスンの辺りに出た。そしてその向こう岸に白亜のジェファスン・メモリアルを認めた。リンカン・メモリアルとは少し趣を異にしたドームがすぐ目についた。

タイダル・ベイスンは相当広い。が，ここもやはり水が澱（よど）んでいる。ポトマック川の汚れほどひどくはないが，曇天も災いしてか，あまりパッとしない。あの何度か目にした美しい絵はがきや写真は，とても期待できなかった。４月の初めであれば，日本の桜が色を添え，風情も楽しめただろうが，今は曇天の灰色とタイダル・ベイスンの水の汚れが，ジェファスン・メモリアルの白との調和を完全に拒んでいるのであった。私たちは，このタイダル・ベイスンの辺りを白亜の建物目指して進んで行った。

途中，黒人の少年たちが何人かこのベイスンに釣り糸を垂れていた。

「やぁ」

「やぁ」

「水はいつもこんなに濁っているのかい？」

「そうだよ」と，彼らは声を揃えて言った。

罐の中を覗いてみると，小さな川魚が２，３匹じっとしていた。少年たちは，誰も靴をはいて

いなかった。

やがて，リンカン・メモリアルと同様に外側を白い円柱の取り囲む，しかし屋根はドームのジェファスン・メモリアルに辿り着いた。ここがこの日の最終訪問地で，一日の疲労が私たちの両肩に重くのしかかって来ていた。

正面の円柱の間を抜けてメモリアルの内部へと足を踏み入れる。真正面に，今度は座像――それも白亜の――ではなく，６フィート（１メートル80センチ）もあるミネソタ産の黒い御影石のペデスタルに，ブロンズの立像が姿勢よろしく私たちを迎える。像の高さは19フィート（５メートル70センチ），大きなものだ。ペデスタルの正面には THOMAS JEFFERSON 1745-1826とはっきり刻まれている。リンカンの座像と比して，ブロンズのゆえにそんなにはでやかさというものは感じられないが，渋みがある。ドームの天井は有名なインディアナの石灰石を用いており，像の頭の先より67フィート（20メートル10センチ）の高さがあるそうだ。このメモリアルの内部は四方をすべて壁で囲み切っているのではなく，採光や眺望のために４ヶ所――正面の入口，像の真後，両サイド――を各々20フィートばかり開けてある。したがって，メモリアルの中から，像のそばから，外の円柱はもちろんのこと，タイダル・ベイスンの遠景までもが目に入って来るのである。ここにもやはり観光客があとを絶たない。

私たちの訪ねたこの日はあいにくの曇天で，ポトマック川の流れも澱み，季節もあの有名な桜並木がその美を競う春４月の上旬ではなかったので，感銘を受ける度合は少なかったが，しかしその時節であったなら，６百本を数えるその桜花は鮮やかにタイダル・ベイスンに映え，ジェファスン・メモリアルにも素晴らしい色を添え，私たちの印象をさらに深いものにしたであろう。私たちは疲れ切った足を引きずるようにして，宿舎ダッジ・ハウスへともどって行った。

●キャピトルとホワイト・ハウス

さて，ワシントン滞在もあと１日となった。その日７月30日は，それまで数日間の曇り空に慣れていた私には，ことのほか美しい日であった。この日も，風邪による憂鬱を吹き飛ばすように，精力的に市内を歩き回った。

その白いドームで知られるキャピトル，すなわち国会議事堂は，ホテルからわずか10分ほどのところにあるので，まずそこをこの日の最初の見学先とした。

大きな噴水があり，緑の木々にこんもりと包まれたキャピトルは，いかにも合衆国議事堂としての風格を備えている。それにしても，すぐ気づくことだが，ニューヨークに比べてワシントンでは緑が至るところに目に入り，それがまた何とも言えない瑞々しさを街全体に与え，好感が持てる。緑の大切さをいっそう思ったことであった。東キャピトル通り（East Capitol Street）の方にまで足を延ばし，正面からキャピトルを眺めた。白亜のそのドームが眩しいほどに白さを発散させていた。そしてその下には，やはり観光客が群がっていた。そして，議事堂見学希望者が殺到して列を作っているのも見えた。その正面入り口に至る階段の前に，赤と黄色のカンナが夏の陽光を受けて美しく光っているのがとても印象的だった。

私たちは――この日はＳ先生と２人で――１人25セント払って見学者の列に加わった。大人に子供，老人に若者，いろんな人が順番を待っている。30分余り待ったろうか，やがて何人かいるガイドの１人が，私たちを含む15人余りを１つのグループとして誘導，堂内を案内，説明してく

れた。上院の会議場にも入った。けれど，カメラ持ち込み厳禁，おまけに見学時間も数分しか許されなかった。

キャピトルの由来等については省くが，１つだけ印象に残ることを記しておこう。それは，キャピトルの正面から入った，ちょうどドームの下にあたる，周囲の大きな壁に，巨大な油絵が何点も所狭しと掲げられていることであった。それらは，順を追ってアメリカ史のビッグ・イヴェントを物語る想像画で，コロンブスの新大陸発見や独立宣言等も無論描かれている。大変な労作であることに間違いはない。私自身，そんな巨大な絵を見たこともなかった。それも１点だけでなく，一度に何点もなど……。

このあと，私たちはペンシルヴァニア通りをホワイト・ハウス目指して歩いた。この大通りはキャピトルとホワイト・ハウスを結ぶ，ほぼ直線の道路である。日差しがかなり暑かった。汗がじっと下着に滲むのを肌に感じた。今から思えば，バスに乗るなり，タクシーを拾うなりして行けばよかったものを，わざわざ足で，しかも往復を歩いたのだから，われながら健脚に目を丸くするばかりだ。が，また反面，思い起こしてみると，楽しいウォーキングでもあった。決して弁解ではなく。なぜなら，行く道に南北戦争で活躍したある将軍の大きな銅像を見つけたり，あるいはベンジャミン・フランクリンを記念する郵便局を見つけたり，またFBI（連邦警察局）の建物の前を通ったりして，予期せざる珍しいものに触れることができたのだから。FBIの前には何十人という見学者がずらりと並んでいた。そしてその近辺では，アイスキャンデー屋や飲み物屋が景気よく売り込んでいた。もうずいぶん歩いていた私たちは一息入れるために，この売り込みの対象者となり，数分後にはスカッとして再び歩行を続けたのであった。

さすがに首都で，官公庁のビルが目立つ。やがて私たちは，ホワイト・ハウスのすぐ近くまで来ていた。このあたりもやはり樹木が安らぎを与え，灰色一色の絶望感から私たちを救ってくれる。緑はやっぱり生命の色だ，と再認識する。道路と道路に挟まれたスペースには花壇や草地が作られ，芝生の上では新聞紙を顔に乗せて，横になっている人の姿がちらほら見えた。名は知らぬが，ピンクの美しい小花も緑の草地に咲いていた。その調和が見事だったので，しばしたたずんで惚れ惚れするのだった。

ホワイト・ハウスは朝の10時から12時までの間であれば見学が許されているが，残念ながらその時間はもうすでに過ぎてしまっており，したがってこの大きな官邸を垣根越しに覗いてみることに留まったのであった。残念だった。正面から望んだが，その前庭の広さは驚嘆に値する。玄関からこの垣根までどのくらいの距離があるだろうか。150メートルは優にあるだろう。しかもすべて芝生がきれいに植え込まれ，ところどころに噴水がいくつか低く上がっているのが見える。木々もよく管理され，豊かに生長している。ホワイト・ハウスの正面入り口の６本の円柱が白く映える。その全体の形は，ちょうど南北戦争前の南部の大農園主の住んでいた邸宅によく似ている。

その屋根にもやはり星条旗が，ハタハタと風を切っているのであった。

●ユニオン駅にて

外からの一瞥のみに多少の不満を心に残しながら，私たちはホワイト・ハウスからホテルへと

もどった。それから，ホテルのすぐ近くにあるユニオン駅にも行ってみた。いつでも行けるというので，遠いところばかり先立って，今になってしまったのだ。ユニオン駅と言えば，鉄道のあらゆる路線が集中して来ている一大ターミナルである。ホテルから初めて見た時には何か古めかしい寺院を思わせ，私の予期に反するものがあった。それが，真っ先にこの駅に足を運べなかった大きな一因でもあったのだと思う。くすんだ灰色のバカでかいだけの建物である。その大きさに比例して，乗客や出入りする人々も群がっていたら，くすんだ灰色ももっと活気を帯びて私の目に入って来ただろうが，人の数はさほど多くもなく，むしろがらんとしているほどなのだ。この大きなターミナルも，やはり鉄道産業の斜陽化の波には勝てないようで，ビルの色は疲労の色でもあったのだ。日本の鉄道産業を念頭において，アメリカの鉄道を等しく理解することは難しい。それは早計だ。なるほど日本の鉄道の発達は素晴らしい。しかし考えようによっては，アメリカではもうすでに鉄道産業は色褪せ，それに代わって自動車や航空機が日本における鉄道と同じ，いやそれ以上の利用率を示しているのである。（鉄道については，また後述する機会がある。）

ユニオン駅の中へ入ってみた。外観と同様，中もかなり広い。この待合室で，興味を引いたものが２つある。１つは，いわゆる自動列車発車告知機とでも言おうか，便利な機器である。ニューヨーク，ボストン，シカゴ，アトランタ，ブリストル……と，行き先が発車時刻とともに自動的に出され，すぐ横には数字で現在時間を教えるまことに便利なものである。それからもう１つは，CURRENT POPULATION OF THE UNITED STATESと示され，その下に一定の時間が経つにつれて，次から次へと数字が変わって行く，つまり合衆国の人口を出生，死亡，入国，出国に分け，統計によって全体人口の概算を出すマシーンなのだ。これによると，出生は９秒ごとに１人，死亡は16.30秒に１人，入国は60秒ごとに１人，出国は23秒ごとに１人という割合を示している。各々に秒針の動く時計が設けられ，自動的に計算され，上の現在のアメリカの人口となって現われて来るのである。今，アルバムを繙（ひもと）くと，私がこの時撮った数字は２億342万６千976となっている。興味あるマシーンであった。

ところで，このユニオン駅の前にかなり大きなファウンテンがあって，豊かな水があふれんばかりであった。そこでは黒人少年５，６人がキャッ，キャッとはしゃぎながら水浴びをしているところであった。本当に真っ黒な少年たちである。日本でならこんな光景――駅前の噴水で何人もの少年たちが水浴びする――など，めったに見ることもない。ところもあろうに，ここは大停車場ユニオン駅である。ここにもアメリカの片手落ちな政策の１つが影を落としているようである。彼らは，何も知らずに楽しそうにはしゃしでいる。でも，大人はよく知っているのだ。

「おい，ペニ貨を投げるから，もぐって拾って来いよ。」

「うん，早く投げてよ，早く！」

胸のあたりまでの深さの水にもぐったり，はしゃいだりしている彼らを見て，私は水の中にコインを投げてやった。すると，彼らはむしろ喧嘩腰に探し始めた。

「もう１つ行くよ。」

もう１枚投げてやった。やはり飛びつくように，水の中にもぐり込む彼らであった。探し当てた子供は，嬉しそうにそれを握っているのだった。

●ワシントン雑感

翌31日，ワシントン滞在の最終日は，前日よりさらに美しい日となった。いよいよきょうでワシントンともお別れである。風邪で体の調子がまだすっきりしないし，それに今夜は夜行長距離バスによる旅が待っているので，体調を整えるために，ホテルの近くをうろついたり，みやげ物屋を物色したり，あるいは随筆を走り書きしたりして過ごすことにした。

みやげ物屋と言えば，どの店を覗いても，ケネディを思い起こさせるものが意外と多い。灰皿，ミニチュア像，ハンケチ，……そして中には“President and Mrs. John F. Kennedy”と描かれ，２人の並んだ写真まで付いている絵皿などがあり，皮肉な感じがする。ケネディの人気とその偉大さ（？）を示すと同様，私にはそれがなぜか痛々しくさえ感じられたのである。ケネディが劇的な最期を遂げて以来まだ日の浅いうちに，未亡人ジャクリーンは，さまざまなスキャンダルの乱れ飛ぶ中で，ギリシャの船主王，老人オナシスと再婚したという報道は，世界中のあらゆる人々を驚嘆と羨望と失望と冷笑等，あらゆる感情の虜にし，その常識を疑ったことは，まだ私たちの記憶に新しい。名誉欲の人一倍強かったと言われる彼女だけに，すでに夫が故人となり，ファースト・レディの夢を欲しいままにできなくなった独占欲の強い一女の結末が大富豪との結婚にまで至ったのであろうか。私たちは，すでに当初から彼らの結婚に愛の不在を感じ取り，そこではただ互いの欲求を満たしたい一念と名誉欲が支配的であったことを察知しないわけにはいかない。ただ当世風の「自由」だ，ということから判断すれば，ジャクリーンの選択も，道徳的な問題は別として，やはり自由だ，ということになるのだろうか。そう思う時，アーリントンの前夫の墓地のオレンジ色の火が，私の脳裏に大きく揺れ動くのは，私の感傷に過ぎないのであろうか。

さて，ワシントンを立つ時間が迫っていた。夜の11時に出るバスで一路シカゴに向かうのだ。一昨日，昨日と大体主要名所の見学は終えているし，今夜は深夜のバス旅行，それも明日の日中一杯はかかるというので，もうどこへも行く気になれなかった。これまではニューヨークからワシントンまで揺られたのが最も長く（わずか５時間），今度はその３倍強もの間，しかも夜間なので，やはり疲労が心配なのであった。

チェック・アウトの時間ぎりぎりまで部屋にいて，それから荷物を預け，前述の通りロビーにいたり，みやげ物屋を覗いてみたりして時間を過ごすのであった。

夜の９時になって，タクシーでいよいよバスターミナルへと向かった。グレイハウンドのバスターミナルは，ワシントンに限らず，９時，10時，11時になっても待合室の乗客は一向に減らない。熱気でむんむんしているほどである。売店でまずいオレンジ・ジュースを飲んだり，ガムを噛んだりして，２時間近く立ち詰めでバスの発車を待った。

予定より10分遅れて11時10分に，大型バスはいよいよシカゴに向かって暗闇の国道70号線に一筋の白い光をあてながら，首都ワシントンをあとにしたのだった。